

安乗埼灯台

大王埼灯台

LIGHTHOUSE WORLD SUMMIT 2018

LIGHTHOUSE

灯台ワールドサミット

IN 志摩

報告書

REPORT

～～目 次～～

1. 「灯台ワールドサミット in 志摩」開催概要	1
2. プログラム	2
3. シンポジウムの記録	4
(1) 開会宣言	
(2) 開催市市長あいさつ	
(3) 調印式	
(4) 来賓祝辞	
(5) 講演	
(6) パネルディスカッション	
(7) 次期開催地あいさつ／大会宣言	
4. 記録写真	26

1. 「灯台ワールドサミット in 志摩」 開催概要

(1) 日時

平成30年11月10日（土）シンポジウム・交流会

平成30年11月11日（日）オプションルツアー

(2) 会場

志摩市阿児アリーナほか

(3) 開催者

主 催：灯台ワールドサミット実行委員会、
一般財団法人自治総合センター

灯台活用推進市町村全国協議会：

志摩市（三重県）、銚子市（千葉県）

御前崎市（静岡県）、出雲市（島根県）

後 援：海上保安庁、観光庁、三重県、

（一社）志摩市観光協会、志摩市商工会、

三重外湾漁業協同組合

協賛：（公社）燈光会、（一財）日本航路標識協会

(4) 参加者数

シンポジウム…………… 298名

〔内訳〕 県内…………… 202名

県外…………… 96名

交流会…………… 52名

オプションルツアー…………… 31名

2. プログラム

■ 1 日目 11 月 10 日 (土)

10:30 ~ [シンポジウム]

オープニング～英虞海神太鼓～

1. 開会宣言 灯台ワールド実行委員長 西尾 新
2. 開催市市長あいさつ 志摩市長 竹内 千尋
3. 調印式 志摩市長 竹内 千尋
銚子市長 越川 信一
御前崎市長 柳澤 重夫
出雲市長 長岡 秀人
4. 来賓祝辞 海上保安庁 交通部長 高原 修司
5. 講演 テーマ「灯台に見る日本の近代」
東京工業大学名誉教授 藤岡 洋保
6. 講演 テーマ「フランス式の灯台と
フランスの灯台観光の現状」
フランス海洋博物館 Vincent Guigueno
〈ヴァンサン ギグノー〉
7. 講演 テーマ「鳥羽志摩地域の灯台」
第四管区海上保安本部
名古屋港海上交通センター 藤島 充良
8. 講演 テーマ「灯台の魅力と観光活用への期待」
灯台専門フリーペーパー「灯台どうだい？」
編集長 不動 まゆう
9. パネルディスカッション
テーマ「地域資源としての灯台を使った
地域活性化策を考える」
コーディネーター／三重大大学名誉教授 渡邊 明
パネリスト／不動 まゆう、ヴァンサン ギグノー、
志摩市長 竹内千尋、銚子市長 越川信一、
御前崎市長 柳澤重夫、出雲市長 長岡秀人
10. 次期開催地あいさつ並びに閉会宣言
銚子市長 越川 信一
11. 閉会 (16:30)

17:30 ~ [交流会]

■ 2日目 11月11日(日)

8:30～ [オプションルツアー]



英虞海神太鼓

3. シンポジウムの記録

(1) 開会宣言

皆さま、おはようございます。ただいま、ご紹介をいただきました、実行委員長の西尾でございます。本日は、非常に良いお天気となりました。これも皆様のおかげと感謝いたしております。

灯台ができて150年、ということでございます。この良き日に、志摩市で第1回灯台ワールドサミットが開催されることを、大変光栄に思っております。また、本日は全国各地から沢山の方にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。歓迎申し上げたいと思います。

さて、みなさんご存知の通り、志摩市には2つの参観灯台がございます。安乗埼灯台、そして大王埼灯台ということでございます。この2つの灯台ですが、非常に多くの観光客の方々にお越しいただいております。この機会に、さらに来ていただきたいと考えております。また、なかなか地元の人も行けないのですが、この機会に是非また灯台を見直していただいて、歴史であるとか魅力を感じていただければ、と思っております。

150年、歴史を照らしてきた灯台、そしてこれから先150年を目指して、夢を、希望を照らす灯台であってほしい、ということを願ひまして、只今より第1回灯台ワールドサミットを開催いたします。よろしくお願い致します。



西尾 新
(灯台ワールド実行委員長)

(2) 開会市市長あいさつ

ボンジュール、皆さんこんにちは。志摩市長の竹内千尋でございます。今日は灯台ワールドサミット in 志摩ということで開催させていただきました。

ボンジュールと最初に言いましたのは、灯台150周年ということですが、明治元年に初めて観音埼灯台が着工され、その任にあたったのがレオンス・ヴェルニーであるということ、それから今日は、フランスから灯台に詳しいヴァンサン・ギグノーさんがお越しになったということで、敬意を表して、フランス語で、ボンジュールですが、歓迎のご挨拶をいたしたところでございます。

先ほどからの映像などにもございましたが、今年は西洋式灯台が日本にできてから150周年、記念の節目の年です。先日も東京におきまして皇太子同妃両殿下のご臨席を仰ぎ、盛大にこの灯台150周年記念式典が行われたということであります。



竹内 千尋
(志摩市長)

当市においても、先ほど実行委員長のご挨拶にもありましたように、安乗埼灯台、それから大王埼灯台という2つの参観灯台を有しています。これらの灯台は古くから海上交通の安全なども含めて、また地域の皆さんに親しまれ、観光振興にも繋がってきたという歴史があります。この参観灯台を灯台ツーリズムとして、最近ではインフラツーリズムといってダムであるとか、歴史的な構造物、建築物を訪ねるというようなツーリズムがありますが、そうしたことが可能になるということでもあります。

私はこの夏、アメリカのカリフォルニアに行き、四日市市と姉妹都市を結んでおりますロングビーチ市の灯台を見て参りました。その灯台は現在、航路安全を守る役目は終わっているわけですが、その周りにレストラン、また人々が安らげるような、そういう場所になっています。多くの皆さんがその灯台を目的に訪れる、あるいは灯台という場所で楽しい時間を過ごしておられる姿を拝見しました。

今般この参観灯台は全国で16基ありますが、今日は犬吠埼灯台を有している銚子市の越川市長、それから御前埼灯台を有しております柳澤市長、そして出雲日御碕灯台を有しております長岡市長にもお越しいただき、まずはこの四つの市から全国の灯台がある自治体に呼びかけまして、灯台をさらなる観光資源として、そしてまた地域の一つのシンボルとしてもっともっと価値を上げていくために協議会を作ろうということでお集まりいただいたところでございます。これから4つの自治体の力を合わせて、そしてまた今日は海上保安庁、それから航路標識協会の皆さんにもお越しいただいております。皆さん方のお力添えをいただきながら、力いっぱい、精一杯、頑張ってお参りたいと思っておりますのでございます。

今日のこのシンポジウムを通じまして、この灯台がさらに親しまれるように、そしてまた平成最後の年にそういった歴史的な価値、灯台の持つ価値を再確認して、そしてまた新しい時代に繋いでいきたいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

今日は灯台女子として非常に活躍の、有名な不動まゆうさんにもご参加をいただいております。先だっては海上保安庁長官賞も受賞されたということで、不動さんに心からお祝いを申し上げます。

来年の灯台サミットは千葉県銚子市で開催するということでもあります。この灯台をさらに、調子（銚子）づけていきたいと思っておりますので、皆様方のさらなるご支援、またご協力をよろしくお願い申し上げます。私の開会の挨拶に代えさせていただきます。よろしくお願い致します。ありがとうございました。

(3) 調印式

志摩市長、銚子市長、御前崎市長、出雲市長により灯台活用推進市町村全国協議会設立のための覚書にご署名をいただきました。



調印式

(4) 来賓祝辞

ただいまご紹介に預かりました、海上保安庁交通部長の高原でございます。本日は志摩市におきまして記念すべき第1回灯台ワールドサミットが開催されますこと、心よりお喜び申し上げます。

また、ご出席の皆様には日頃から海上保安庁に対し、多大なるご協力やご支援を賜り、この場をお借りしまして深く御礼を申し上げます。

さて、海上保安庁では先ほどの映像にございましたように、わが国最初の洋式灯台である観音埼灯台が明治元年11月1日に着工されたことにちなんで、同日を灯台記念日と定めており、今年はちょうどその150周年となります。

この節目となる年を記念し、先ほど竹内市長からのお話もありましたように、先週11月1日には皇太子同妃両殿下のご厚意を賜り、灯台の運営など航行安全業務に尽力してきた関係者の方々などをお招きし、灯台150周年記念式典を開催したところでございます。

このような記念すべき年に、灯台の積極的な観光資源化により、その活用を促進し歴史的な灯台を次世代に引き継ぐことを目的とした灯台ワールドサミットがここ志摩市で初めて開催され、灯台の歴史や魅力を再認識していただけることを大変意義深いことと考えております。

私も今朝こちらの会場に来る前に、安乗埼灯台を訪問して参りました。安乗埼灯台は、昭和の名画「喜びも悲しみも幾歳月」の舞台のひとつとなった灯台でございますけれども、歴史ある灯台を訪問し、かつての灯台守の生活に思いを馳せながら、改めて本日のサミットの意義を深く感じたところでございます。

この大変意義深いサミットが開催されるにあたりまして、志摩市をはじめとする参観灯台を有する自治体の市長の皆様、サミット実行委員会の皆様、ご講演者の皆様など、サミット開催にご尽力いただきました全ての皆様に深く感謝申し上げます。海上保安庁としても、灯台活用推進市町村全国協議会をはじめとする皆様と連携を図り、灯台の魅力と価値を向上するための取り組みをこれまで以上に強固に推進して参る所存でございます。



高原 修司
(海上保安庁交通部長)

最後に、本日のサミットへご出席の皆様のご健勝とご多幸を祈念いたしまして、簡単でございますが私からのご挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

(5) 講演

「灯台に見る日本の近代」

講師：藤岡 洋保（東京工業大学名誉教授）

私は建築の歴史を研究している者として、建築の歴史の立場から日本の灯台の歴史についてお話しします。

洋式灯台建設の直接のきっかけは江戸条約、あるいは改税約書という条約です。1863年と64年に下関事件があり、アメリカ、イギリス、フランス、オランダの4カ国が幕府に損害賠償を求めた。その中に8つの場所に灯台を作れという条件がありました。わざわざ場所まで指定して灯台を作することを求めた。彼らにとって定期航路の安全確保が大事だったからです。帆船ではなく蒸気で動く鉄の船は決まった時間で往復できる、当時の新しいビジネスモデルです。



藤岡 洋保
(東京工業大学名誉教授)

日本にとっても灯台の整備は重要でした。開国して近代化するためには船の輸送こそが大事なことで、日本も官庁を作ります。工部省に燈台寮というセクションを設け、国が灯台を作る体制を作りました。最初の灯台は観音埼灯台で、設計し、建設したのはフランス人です。彼らが作ったのはこの4つの灯台です。レンガ造が特徴的ですが、これは横須賀の製鉄所でレンガを作っていたからです。そのあとはスコットランドから来たブラントンという人が、その建設を担うことになります。彼はもともと鉄道が専門でしたが、スコットランドの灯台を作っていた一家のデイビッドとトーマスのスティーブンソン兄弟から指導を受けて灯台を作ります。日本ではブラントンの非常に注目されるんですけども、その後ろにいたスティーブンソン兄弟も非常に重要な存在であるといえます。スティーブンソン兄弟はブラントンの技術情報を提供したり、灯器を設計したり、資材の調達、資金の管理など非常に良い仕事をしています。

ブラントンらが作ったのは31基の航路標識です。現存する灯台の中で一番古いのがこの神子元島灯台です。これは部埼灯台。灯台守の吏員退息所、つまり灯台守の官舎で、完全な洋風住宅ですね。畳が全然ない。日本でも最初期の洋風住宅です。犬吠埼灯台。銚子にあります。ここでの注目は高さです。31.3メートルあります。そして構造にも注目してください。二重円筒構造になっています。内側の筒と外側の筒があり、その間を壁がつないでいます。それから吏員退息所。スコットランドのものは屋根がほとんど水平なんですね。あまり強い雨が降らない。でも日本はそうじゃないのでこういう風に形を変えています。

これは彼が作ったものの中で、私が一番評価する灯台です。角島灯台。デザインがとても綺麗です。花崗石の非常に緻密な、丁寧な施工がしてある。日本の石工がやったものです。これがどこから来たかというところ秋穂という山口県のもので、石の産地が海のそばにあるということは覚えておいてください。

明治初期の灯台の設置場所を赤い点で印した図です。1886年まで、明治9年までですね。これを見ると非常に大きな特徴がわかります。日本海側や北海道にはほとんどない。あるのは太平洋航路沿い。アメリカから来る時の航路沿い。そして瀬戸内海航路。これは日本のニーズに沿ったものではありません。列強の都合で彼らの定期航路沿いに作られました。そして最初の4基をフランス人が作り、その後はブラントンらのイギリス人、厳密に言うとスコットランドの人たちがやった。ブラントンは同時に日本人技術者を養成しています。横浜に修技校という学校を作り、技術者何人かをエディンバラ大学に派遣して灯台技術を学ばせています。当時のスコットランドは技術の先進地帯だったんですね。

明治13年から日本人技術者による灯台の建設運営が始まります。明治20年頃に国による灯台の建設、管理の体制が整ったといえます。その時にリーダーになった日本の技術者は、まず藤倉見達さん。この人は子どもの時に横浜に出て英語を勉強しました。ブラントンが来た時に通訳が必要になり、試験で選ばれたのが彼です。ブラントンについて実地で灯台技術を学びました。その後エディンバラ大学に留学しています。この人の代表的な灯台は宮崎県の鞍碓灯台。日本で最初の無筋コンクリートの灯台です。もう一人、石橋絢彦さん。この人は対照的な経歴で、工部大学校土木科を卒業しています。エリートですね。この人は一番で卒業して、イギリスで灯台の勉強するように言われました。国がいかに灯台建設を重視していたかが分かります。彼の代表作は出雲日御碕灯台と水ノ子島灯台です。

最初の日本の灯台は外国の大型の船のためのものでした。日本のニーズで決まったわけではありませんから、日本の色んなところから不満が出始めます。そこで海洋諸標位置検討委員会というものが作られ、逓信省と海軍省から委員を出して建設位置を決めることになります。灯台の機械は高価ですから、どこに作るかがとても大事でした。

次に北海道の灯台整備。北海道はちょっと特殊で、明治20年代に一気に26基を整備します。北海道は冬とても危ないところなんですけど航路標識がない。でも船の安全航行の為に絶対必要だということで、北海道自らがお金を出して灯台を作る。できた後は逓信省に移管して運用してもらおう。いかに北海道が灯台の建設を必要としていたかが分かります。

次に、明治30年代の灯台建設予算の増加について。日清戦争で日本は多額の賠償金を得ます。同時にとん税法というのが作られます。これは船がトン数とか積載量に応じて税金を払う、それを航路標識の整備に充てる法律です。これと賠償金両方をセットして、予算が大幅に増えるんですね。この時に大規模灯台が作られています。日本海側にも灯台がたくさんできることになりました。

この日本における灯台建設の契機といいますか、どこに灯台を作るか。これとっても大事なんですが、1番はすでに説明しましたので、2番から4番までを説明します。地域の要望、灯台誘致運動。海軍の要請。国防上の問題。海運関係者、船長や船主の方々の要望です。

まず、地域の要望の事例として出雲日御碕灯台。実際に灯台が出来る10年位前から灯台誘致運動をやっています。ここから見えてくるのは、その地域の発展に灯台が大事だということです。当時は鉄道も道もなく、人や物の輸送は全て船にかかっています。その安全航行がなければ、産業や経済は発展しません。ただし、この灯台ができたのは国防上の理由もあったと私は考えます。高い崖の上にあるにも関わらず日本一の高さがあり、これには監視塔の役割があると思っています。

海軍の要請の事例のひとつが水ノ子島灯台です。こちらが瀬戸内海で下が太平洋、九州、四国。ここが豊後水道。ここに小さな岩礁の島がありましてそこに作ったのが水ノ子島灯台です。軍港の呉から外海に出るために作られました。

それから、海運関係者の要請。これは例えば船主同盟会、船を持っている人たちからの要請です。ここで注目すべきは、この人たちがとん税法を改正して欲しい、自分たちが負担する税率を上げてでも航路標識を整備して欲しいと言っていることです。それくらい緊急度が高かったんですね。

灯台は木造、石造、レンガ造、鉄造、無筋コンクリート造、鉄筋コンクリート造、いろんなタイプのものがあります。まず、鉄の灯台からご紹介しましょう。現在残っている鉄の灯台で一番大きいもの、それがこの室戸岬灯台です。1899年にできました。鉄で作るというのは割と値段が高いのですが、工事期間を短くできます。次にコンクリート造ですが、無筋コンクリート、鉄筋が入っていないコンクリート造で最初のものがこの鞍碓灯台で、明治17年です。ご覧のように多角形になっています。こちらは組積造。石とかレンガを積んで作るものを組積造といいます。石というのは強く波への抵抗力、耐久性に最も優れている。でも波をかぶらない所ならレンガでも大丈夫。勿論コストが下げられますし施工期間も短くなります。この出雲日御碕灯台は日本の灯塔の中で最も高い灯台です。設計したのは石橋絢彦さんです。

もうひとつ、水ノ子島灯台。これがそうした組積造で出来た最後の、なおかつ一番すごい灯台です。海軍の要請で作られました。すごく高くて40m近くあります。これは山口県黒髪島の花崗石を使っています。ハッチでいろんなものを引き上げるために中心部分を空けなければいけないので分銅筒が端についている。これは柵みたいに見えますがベッドです。吏員退息所が設けられないほど狭いですね。対岸の大分県の鶴見に吏員退息所があって2週間交代2チームで交代勤務をしました。それくらい厳しいところです。

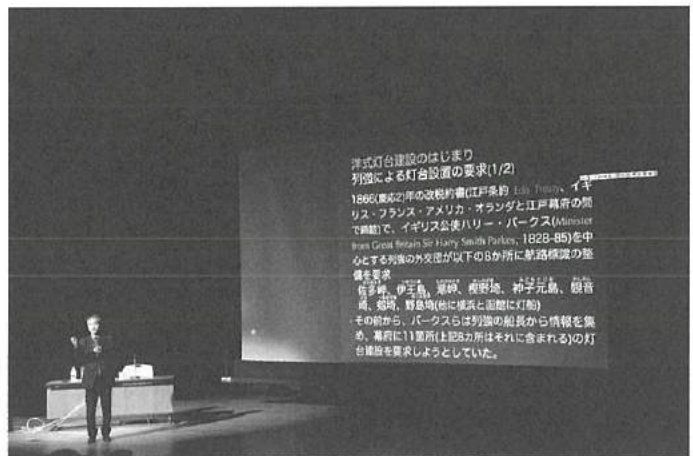
最初の鉄筋コンクリートの灯台がこれです。清水灯台で1912年。この灯台も地元の請願で出来ました。鉄筋コンクリートの灯台で一番すごいのがこの灯台です。かつては中知床岬灯台と呼ばれました。サハリンにあり、今はアニワ岬灯台といいます。設計者は三浦忍さんという人でした。三浦忍さんは他にも実にいいデザインの灯台を作っています。

灯台は一見単純な構造物で、みんな同じように見えますが、実はそこからいろんな意味を読み取ることができます。まず一つは、西洋技術の導入の仕方を知ること。どう応用したのか。その応用するための日本の条件は何だったのか。技術の歴史の中でとても意味のある面白い例の一つです。2番目。構造はいろいろありますが、それぞれ資材をどうやって調達するか、現場の状況、職人の手配、さまざまな工夫が必要です。それぞれのストーリーを見ていくと更にいろんな事が発見できます。3番目。国際情勢、地域の意向、日本の政府が富国強兵のためにいろんな工夫を

していたという状況も灯台の歴史から見えてくる。歴史的な灯台には文化的価値、歴史的価値を見つけることができると思います。

公共施設の中で灯台は非常に例外的に、メンテナンスがちゃんとしていました。なぜかという、灯台守が常駐して、金属部品を磨いたり、塗装をし直したりしていたからです。灯台官舎の人達のおかげで我々が今日いろんなことを知ることができるということは是非記憶していただきたいと思います。

私は灯台150年にあたり、あまり浮かれた気持ちになっていません。この文化的価値を維持するためには、まず皆さんに、特に国民の方々に、この文化的価値をよく認識していただきたい。それぞれの地域の歴史を反映している事を是非ご理解いただいて、灯台のサポーター、ファンを増やす必要があると思います。もしかして、いずれ地方自治体に下げ渡すとか、そういう事も必ず問題になります。ですからあまり浮かれている時ではなく、危機なんですね。そういう事をご理解いただいて、灯台に温かい目を向けていただければと思います。どうもありがとうございます。



「フランス式の灯台とフランスの灯台観光の現状」

講師：Vincent Guigueno 〈ヴァンサン ギグノー〉（フランス海洋博物館）

こんにちは。私はヴァンサン・ギグノーです。フランスからやって参りました。私は日本の灯台と日本史について少しだけ知っています。また、歴史家として、灯台史上でどのようにフランスが秀でた国になったかを知っています。2001年に私の博士論文が出版されました。私は最初、文化遺産の専門家でした。私は数年来、美術館での美術的遺産に関わっています。そのため灯台がどのように文化遺産になり、観光の機会になり得るかを少し知っています。



Vincent Guigueno ヴァンサン ギグノー
（フランス海洋博物館）

30年前から議論があったフランス灯台遺産についての問題を少し話します。灯台とは何か。多くの定義があります。基準を決めるもの、高い場所、ステータス、灯台を守る人たち、IAR

Aという国際管理委員会が1950年にパリで設立されました。その中の定義が、5つの条件のうち2つを満たせば灯台と認められるものです。まず、1つ目は人がそこに住んでいるか。もしくは人がいるか。2つ目は、いくつかの建物で構成されている。3つめは、灯台の高さが10m以上でなくてはならない。しかしフランスは20m以上でなくてはならないという定義があります。4つ目は、その光の範囲が15海里以上でなくてはならない。しかしフランスはそれが20海里以上になります。そして最後、光が持続的なナビゲーションで一般的なナビゲーションであること。これが灯台の定義です。14世紀につくられた、このブルターニュの非常に小さい灯台は、最初、遺産登録調査で灯台と認定されませんでした。これは余りにも小さかったからです。10mくらいのものです。しかし周りの人はこれを灯台だと言います。灯台守が住んでいる、人々の為のもの、それが灯台です。灯台守の歴史はおそらく最も重要な基準です。

灯台の歴史はいつ始まるか。ほとんどの人が、アレクサンドリアの塔と答えます。しかし我々が近代的な灯台を答えるならばジロンド川の河口にあるコルドゥアン灯台と答えます。厳密に言えばフランスの最初の灯台はローマ人がドーバー海峡のプローニュに立てたものですが、今まだ現役のコルドゥアン灯台がもっとも有名で、最も誇り高い灯台といえます。17世紀に国王の名のもとに建設され、革命を経て1820年にはベネルの研究所になり、1862年には初めての国民記念碑として登録されました。近々ユネスコ遺産に登録されることになっています。

我々はイギリスが第一の近代的灯台事業を持っていた事を認めなくてはなりません。1800年にはヨーロッパ諸国は世界で150基の灯台、その半分を大英帝国が所有していました。当時フランスはわずか12基のみ、マイナーな国でした。そこにフレネルが登場します。皆さんご存知のオーギュスタン・フレネルは世界的に普及しているレンズシステムを作ったフランスの有名な科学者であり、エンジニアです。もしフレネルがいなかったら全く新しいシステムの灯台は出来なかったでしょう。フレネルは1811年に創設されたフランスの灯台委員会に参加しました。フレネルは理事会の事務長でありレンズに基づくシステムを考案しました。理事会の支援がなければフレネルは新しいシステムを導入する機会を得られませんでした。また優れた科学機器メーカーがなければ新しい機器を生産するチャンスもなかったでしょう。とても重要なことはレンズシステムが実装されたことで、これは灯台委員会がフランスの海岸に40もの新しい灯台を建設する意欲的なプロジェクトを持っていたからです。この野望がなければ、フレネルシステムは必要とされませんでした。

19世紀の終わりにはいくつかの主要な灯台が建設されました。これらは新しい照明技術が搭載されています。第二次世界大戦の頃、ドイツによる破壊で多くの灯台が無くなりましたが、その後、多くの美しい灯台が建築家によって建てられ、長い歴史の中でフランス灯台の建築が多様性を生みました。

パリは政権の首都だけではありません。植民地の帝国であり19世紀の主要工業国でもありました。私たちはこの国の植民地時代の歴史をすでに忘れていますが、灯台は植民地時代の基盤の一部でした。フランスの植民地時代の帝国領土の地図によりますと、フランスのエンジニアたちが作ったフランス灯台を見つけることが出来ます。有名な灯台をご紹介します。アメデ灯台。ニューカレドニアのアメデ島にあります。パリで建設されバラバラにしてニューカレドニアに送

りました。ここが日本から一番近いフランスの灯台ですね。フランスは植民地だけではなく独立異国にも灯台を建設し、西側諸国がそれを建設するように促しました。モロッコのスパルテル岬の灯台は1864年にフランス、イギリス、スペインの国際的合意のもとに建設されました。

先ほどの写真と同じ時代です。今年、1858年10月9日にて日本と150周年記念を迎えます。西側諸国による日本の港の開港につながる、いわゆる不平等条約の1つでした。1865年には2カ国間、フランスと日本、特に横須賀の計画と軍事の計画が決定され、それはフランスのエンジニアであるフロランによる4つの灯台の建設に繋がる、よく知られた話です。その後、スコットランドの影響を受けた灯台が次々建設されることと比べると、それは、とても小さな話になってしまいますね。しかし灯台ビジネスとテクノロジーの歴史は、単なる歴史ではありません。国家間で最新技術や物品を交換する機会でもありました。

私が最終的に追い求めるものは、照明システムの国際的な規制です。それは19世紀の終わりから続く、長く複雑な物語です。我々は日本の灯台とフランスの灯台との間の情報交換の証を有しており、これは普遍的なシステムの一步に繋がります。人々、技術の循環は灯台の多国的ビジョンにとって重要です。

それでは、遺産の問題に移りましょう。次世代に移すべき遺産問題の論争は、ここ2、30年からです。2つの大きな技術的変化がもたらされました。1つは灯台に人が常駐する形態が無くなったこと。これは灯台モニュメントのメンテナンスの問題を意味します。しかし最も重要な変更は海洋安全の新しいパラダイムで、レーダー、GPSによる海上交通の制御に基づいています。灯台は受動的なシステムであり船に光信号を送り灯台の位置を見つけることができます。第二次世界大戦以降、海上輸送の巨大な成長の為に諸国は船舶を制御し、特に細い海峡で船を監視しなければなりません。残念ながら灯台は海上交通を確保するためには十分ではないのです。

灯台は1990年代に文化的な現象となりました。有名なジャン・ジシャールが撮ったいくつかの写真は世界的なアイテムになりました。この写真を撮った時には灯台守が住んでいますが、今はもう住んでいません。灯台の将来を確保するための一つの解決策は、もちろん一般にそれらを開放することです。灯台訪問は19世紀にフランスの人々が浜辺のリゾートに行くようになったのが始まりでした。それは地方自治体への灯台管理への転換になる大きな勢いを得ています。35の訪問可能な灯台がフランスにはあります。年間75万人が灯台を訪れます。灯台は国のネットワークですが、灯台観光は地元の問題であり責任感があります。フランスでは108の灯台が、文化的モニュメントとして認識されています。国の記念碑のリストを載せるために多くの仕事が必要でした。遺産は建物を持続させるだけというものではありません。重要ではない遺産、科学的研究も行わなければならないのです。博物館は灯台遺産の伝達においても有用な役割を果たしています。それは古い科学機器、灯台キーパー、機材など物体を収集し灯台の話を伝えることが可能です。人類遺産、政策はこれらすべての分野において一貫していなければなりません。建物、オブジェ、思い出、公文書記録を保存する灯台管理だけの問題でもなく、文化機関、美術館、文部省と地方自治体の支援を受けなければなりません。それはまた、グローバルでなければいけません。私たちは国の間で共有する物語を持っています。

私は幸せに思います。ここであなたがたの歴史と遺産プロジェクトについて学び、私の研究経

験を聴いていただき、そのプロセスに関わる人々にお会いできたことを。灯台、それは我々が共通する人間の大きな関心ごと、遺産です。ありがとうございました。



「鳥羽志摩地域の灯台」

講師：藤島 充良（第四管区海上保安本部 名古屋港海上交通センター）

名古屋港海上交通センターの藤島です。鳥羽志摩地域の灯台についてお話をさせていただきます。私は昭和62年、当時ありました鳥羽航路標識事務所が初任で、この志摩にもよく来ていましたので思い出の多いところでは。私の現在の勤務先、名古屋港海上交通センターは、年間約3万3千隻の船が入港する名古屋港で船の管制や情報提供を行っています。

まず灯台事業を所管する組織の変遷をお話しします。この業界は横浜を発祥地として明治元年からやってきて、今年で150周年を迎えました。明治元年には外国事務科、横浜裁判所が所管していました。明治2年には外国との関係から外務省燈明事務局、明治4年には法務省灯台事務局。明治18年には通信省灯台局となり、明治24年には航路標識管理所となりました。この航路標識管理所は大正12年の関東大震災で、倒壊全焼の被害を受けています。それから運輸省になりまして、昭和23年に海上保安庁の灯台局になり、海上保安庁としては今年70周年を迎えます。

鳥羽志摩における主な灯台としては、志摩市には参観灯台といって常に登れる灯台として大王崎と安乗崎灯台があり、重要な観光スポットとなっています。鳥羽市においては三島由紀夫氏の潮騒の舞台となった神島灯台と、現存する日本最古のレンガ作りの菅島灯台があります。この4つの灯台について詳しく説明したいと思います。

まず安乗崎灯台。平成16年から参観灯台となって年間約1万3千人が訪れています。この位置に灯台資料館があり、安乗崎灯台に関する資料が展示されています。昭和63年に安乗崎航路



講師：藤島 充良

（第四管区海上保安本部 名古屋港海上交通センター）

事務所が鳥羽航路事務所に統合されて、私も1年この灯台を保守させていただきました。明治6年4月1日が正式な点灯日です。今から337年前の1681年に御城米廻船条例によって約3mの高さの灯明台を設置しています。安乗は上方、つまり大阪から江戸までの重要な風待ち港で、的矢湾に入る和船に有益であることから明治4年に灯台の建設が進められました。安乗埼灯台は明治元年にイギリスから来日した日本の灯台の父といわれるブラントンによって建設されています。ブラントンは安乗埼灯台で2つの初の試みを行っています。まずフレネル式多面レンズを使用した回転灯の導入。また、灯台付属官舎、倉庫をレンガ造としています。このレンガは渡鹿野島の瓦屋、竹内仙太郎氏が焼製しています。竹内仙太郎氏は安乗埼灯台官舎、菅島灯台、山口県の角島灯台のレンガ焼製に関わり、大変進歩的な事業家肌の方だったといわれています。これが初代安乗埼灯台です。官舎は保存措置が取られず撤去されましたが、もし保存されていれば日本最古のレンガ官舎と日本最古の洋式木造灯台の最高のペアでした。これは、初代安乗埼灯台で昭和30年頃、横浜に移築された頃の写真で移設撤灯式も行われています。日本最古の洋式木造灯台で銘版には明治5年4月29日の仮点灯の日が刻印されています。これは2代目安乗埼灯台で、昭和23年に四角形にて建てられたものです。平成25年に国の有形文化財に登録されています。安乗埼灯台は平成10年に大規模な耐震補強が行われています。右の写真は安乗埼灯台近くにある灯台資料館で保管されている2代目の第4等フレネルレンズと回転機械です。

次は鳥羽市にある菅島灯台です。菅島灯台はブラントンが設計した17番目の灯台です。西洋の城塞を思わせる様式で、現役の日本最古のレンガ造りの灯台となります。この灯台は登録有形文化財に登録、近代化産業遺産に認定されています。ブラントンの設計したレンガ造りの灯台では第1号となります。今は門から灯台まで道路がレンガで舗装されて綺麗になっています。国内で現存するレンガ造りの灯台は10基ありますが、この菅島灯台外側のレンガ表面にはモルタルが塗られていませんので、レンガ積の積み方が良く分かります。レンガの積み方にはイギリス積やフランス積などがあります。菅島灯台ほかブラントン灯台はイギリス式となっていて、レンガの積み方でどこの国の影響を受けたかというのが分かりますね。菅島灯台は明治6年7月1日に点灯しています。灯塔の入口窓などに花崗岩が積んであり、開口部の補強、美観の上からも良い印象となっています。徳川幕府の頃、江戸の人口が年々増加したため食料を船で運んでいましたが、菅島付近は岩礁が多く難破する船が続出したので幕府が菅島にかがり小屋を設置し、菅島の松は全てかがり火用として約200年灯されました。やがて明治政府に移行し、早急に洋式灯台の建設が必要となったので明治6年に菅島灯台が建設されました。

これは神島灯台です。私は初任の昭和62年から3年間、いわゆる灯台守をやっていました。風光明媚なところで、伊勢湾が一望できて晴れ渡った日は富士山も見えました。灯台には画家や野鳥愛好家、観光客が結構来られましたし、私も初任の灯台でもありましたので、灯台を含め周囲の環境整備を一生懸命やりました。これが神島で、灯台はこの位置です。私の赴任した昭和62年ころは神島の人口は約800名でした。今は約半分となっています。島の方には「灯台さん」とよばれ、本当に大切にされてきました。神島の前の伊良湖水道は昔から海の難所で、「阿波の鳴門か、門戸の瀬戸か、伊良湖度合いが恐ろしい。」と船頭歌に唄われるほどでした。明治41年の軍艦あさひの座礁、名古屋、四日市の交易振興から灯台が必要となり、明治43年に神島灯台が建設されました。三島由紀夫氏の潮騒の舞台となったことで有名です。これは初代神島灯台、

鉄でできています。昭和41年にコンクリート造に改修されています。これは昭和41年の神島灯台の立て替え時の図面ですが、新しい灯台は少し反時計回りに振られていますね。吏員退息所が4つ建っています。この第3吏員退息所は、山口百恵さんの潮騒の昭和50年でこれがまだ残っていました。久保新治役の三浦友和さんがこの階段を上がって灯台長の奥さんに魚を差し入れするシーンがこの官舎です。これは私が神島灯台に滞在していた昭和62年ころの写真で、第4等フレネルレンズが入っていました。これは現在、明治村に展示されています。

最後に大王埼灯台。斬新でおしゃれな塔体をもつ灯台で、年間約4万人が訪れています。大王埼の沖合は黒潮の影響で昔から海の難所で、明治17年に灯台建設の計画が立てられました。大正時代に2度の大きな海難事故がありました。サーパネシアの遭難、巡洋艦おとわの座礁があって、海難防止対策として計画から43年経って灯台が建設されました。大王埼灯台は、昭和2年に点灯し、関東大震災後に国が建設した初の新設灯台となりました。これだけの大規模灯台の建設は昭和の灯台第1号、それから震災復興のシンボルだったと思われます。これは平成15年の11月の灯台記念日に地元の方々に盛大にお祝いしていただいた時の写真です。これが旧大王埼航路標識事務所で、今は灯台ミュージアムになっています。これが当時の所長宿舎で、これが次長以下の職員の宿舎です。大王埼灯台は平成25年に国の登録有形文化財に登録されています。これが現在の大王埼灯台です。職員用の宿舎が撤去されているのが良く分ります。ここで知られざるエピソードを紹介します。私が八管区で塔台技術官をしていた平成17年に出雲日御碕灯台が雷の直撃を受けて機器が焼損した際に、この大王埼灯台で撤去したメタルハライド点灯装置一式をいただいて、出雲日御碕灯台に入れていました。平成21年に新しいメタルハライド点灯装置に交換したため、わずか3年だけですが、大王埼灯台の灯りが出雲日御碕灯台で灯されたということになります。

明治初期から西洋技術を取り入れた灯台は歴史的、文化的価値の高い建造物として今般、登録有形文化財の登録や近代化産業遺産に認定されるなど、非常にその価値が高まっています。登録有形文化財に現役の灯台が平成19年からの10年間で12基登録されています。志摩市に2基、鳥羽海上保安部所管としては3基あり、文化的価値の高い灯台が集まっている地域と言えると思います。私も長く灯台と関わってきましたが、特に歴史的文化的価値の高い灯台はかけがえの無い宝物で、オリジナルを残しつつ未来へ伝えていかなければならないと考えます。また、灯台は立派な観光資源になりますので、地域の発展につながるよう、地域との連携が大切と考えます。どうもありがとうございました。



灯台の魅力と観光活用への期待」

講師：不動 まゆう（灯台専門フリーペーパー「灯台どうだい？」編集長）

こんにちは。灯台女子、灯台マニア、そして「灯台どうだい？」というフリーペーパーを自腹で発行しております、不動まゆうと申します。今日は灯台の観光活用について私の考えるところをお話しさせていただきたいと思います。結論から申し上げます。結論、まず灯台は観光資源として大いに活用でき、地域活性に繋がります。その理由として、私の考える灯台の魅力と、また私が世界各地を取材してきた観光活用の実例をお話しします。



講師：不動 まゆう

（灯台専門フリーペーパー「灯台どうだい？」編集長）

まず、灯台の魅力その1。こちらは「灯台から考える海の近代」という、金沢大学の谷川竜一先生のご本です。「ぼつねんと孤立しているようだけでも、実は壮大で近代的な時空間認識を背負った建造物、それが灯台である。」と先生はおっしゃっているんですね。ちょっと見てみましょう。確かに、ぼつねんとしてます。为什么呢、この寂しい感じ。私はここにきゅんとくるんですけど、何も知識を持たない方がこの近くを通ったら「わあ、寂しい無人島に灯台が立っているわ。」って思うかもしれません。でもこの灯台、実はすごいです。さきほど藤岡先生のお話にもありましたが、日本における現存最古の現役灯台です。建てられたのは明治3年、1871年の1月1日、初点灯と書いてあります。今から147年前のお正月、この灯台が誕生して、その時になんと木戸孝允、大久保利通、英国公使ハリー・パークスなど、まさに当時の明治政府の要人が駆け付けたんですね。まさに重要な国家事業、これから近代化していく日本はこの灯台によってきっと支えられるであろう、それに立ち会おうということで要人が集まった。そんな灯台なんですね。

ここで歴史的な灯台がなぜ地域観光に役立つかをお話しします。公益財団法人日本交通公社の資料を拝見したところ、旅行市場において歴史観光文化というのが重要視されているということがわかったんですね。行ってみたい旅行タイプのアンケートをとったところ、まず第1位が温泉旅行。続いて自然観光。次にグルメ。そして、次に私はきっとショッピングとかが出てくるかなと思いましたが、ここです、歴史・文化観光というのが出てくるんです。私はここに当然、灯台が入ってくるべき、入っているべきだと思っています。灯台の建っている場所は崖の上だったり、山の中だったりするので自然を楽しむこともできますし、灯台の近くで美味しいお魚がたくさん捕れますのでグルメも楽しめます。旅行の目的地として灯台は当然これからもっと人気が出てくるべきだと思うんですね。さらに旅行商戦の中で特に幕末と明治維新というのに関心が高いと調査でわかっているそうです。また歴史・文化観光は20代～30代という若年層にも高い魅力を感じられている。実は幕末・明治以外にも、江戸時代にも興味がある方が多いそうです。日本はまさに江戸時代、明治より前から日本式の灯台を建てていて、今から150年前の明治期に西洋式の灯台に変わっていくという少し変わった歴史を持っていますので、日本式の灯台と西洋式の灯台、日本の近代化が灯台を通じてよくわかる。これは小学校、中学校、歴史を勉強する

上でも実際に実物を見て肌で感じるという教材にうってつけだと私は思います。

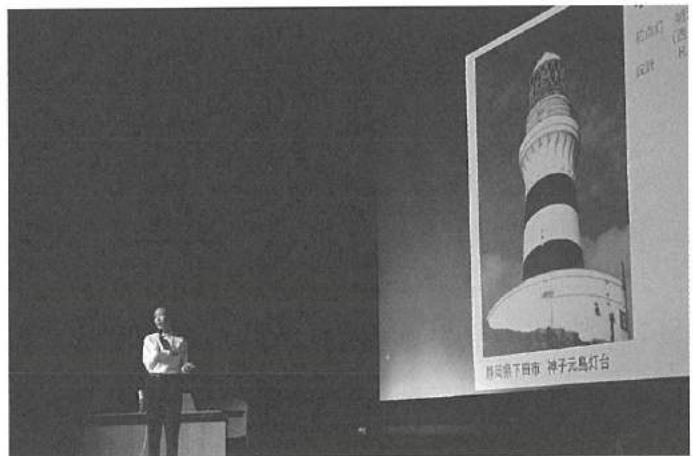
では続いて魅力の2なんですけども、灯台には個性があるというお話をさせていただきたいと思います。「え？灯台って全部白くて同じような形なんじゃないの？」って聞かれることがあります。ちょっと残念に思うんですけども、明治期から大正・昭和初期にかけて日本人の技術者の方も様々な工夫を凝らした素敵な灯台を建てていらっしゃいます。ただ、日本の場合は、戦争で壊れてしまったり、地震で倒れてしまったり、そこから急成長をしなくてはならなかったのも、一度に多くの灯台を日本中に建てる必要がありました。そのためにある程度型式を決めて、効率よく視認性のいい白でよく見えるという灯台を建てています。フランス人のヴァンサンさんからすると、もしかしたら日本の灯台は結構みんな似ているなど感じられるかもしれないですね。私もフランスで色々な灯台を巡っていますが、本当に個性が豊かなものが多くて楽しいです。でも逆に言うとそれがお国柄だと思うんですね。日本は本当に真面目な、船からよく見えるように一生懸命建っているっていう雰囲気（霧気）の灯台がたくさんあって、そこを見出していくとぐっと魅力的に感じます。その中にも必ずちゃんとした個性があります。例えば背の高さ。出雲日御碕灯台、やっぱりのっぽで、すらっとしてかっこいいです。大好きです。でもね、特牛灯台、明治45年に建てられた灯台、とっても小さいんですが、こんなとっても可愛らしい灯台もあるんですね。体型、まあスタイルですけども、左側はハイウエストで、ウエストがすごい高い位置にあって、ボンキュッボンみたいな感じで大変スタイルがいい。かと思うと、江崎灯台はもう豊満なボディをひけらかしているように、もうなんか埋まっちゃっているみたいに、これはこれですごく可愛らしい。もう全然違いますよね。日本の灯台は沿岸灯台に限っては、白を基準としています。やはり日本は山が後ろにすぐそびえてることが多いです。船から見るとよくわかるんですが、夜は山が光を吸って真っ黒、暗く見えます。そこに白い塔の方がよく見えるんですね。ただ、石狩灯台、北海道の灯台は、後ろが雪で白くなるので、赤白、もしくは黒白の場合もあります。このように縞模様がついているものもありますし、御影石の美しい無塗装の角島灯台のように少し色も違うものがあります。次に素材なんですけども、明治初期の頃は大変多く造られた木造の灯台、レンガ造りの灯台。こちら尻屋埼灯台ですね。中に入るとレンガ造りであることがよくわかります。あとですね、レンガはスベスベしてて、もち肌っていう感じです。こちら、石造りの灯台はこのような肌質、強そうな感じですよね。こちらは、日本で現役最古の鉄造りの灯台、姫埼灯台ですけども、シルエットが全然個性的なアングルの造りです。これが日本最古の鉄筋、コンクリート造りの清水灯台。素材の面から見ても、様々な個性ということで見ることもできるんじゃないでしょうか。地域公共団体などと連携してその土地の文化とかシンボルを灯台の意匠をデザインに盛り込んでるものもあります。ガラスでできた、灯塔の部分が光る灯台、高松港にある灯台もあります。このような個性的な灯台のことを伝えるために、私は擬人化という方法を考えています。灯台を人として見るんです。だって灯台って一生懸命、夜みんなのために見守っているっていう、理想の男性像のような感じですよね。まず塔の高さやシルエットは体型です。塔の素材は性格、例えば鉄造りだったら熱しやすく冷めやすい性格とかですね。あとは周囲の環境、まあ孤島に建っていると一匹狼で、一人で頑張るタイプとか。あと灯質、灯台はそれぞれ光り方が違うんですけども、それを隠れた一面なんていうふうに見ていきます。ほとんど私の妄想なんですけどね。

灯台は船からよく見える場所に建っているのだから、私たちが陸から行っても海が絶景の場所とい

う風に考えることができます。昼間もすごく美しいですし、夜には真っ暗な海と空と、その水平線に光りがファーっと走っていくんです。振り返ると今度はフレネルレンズから、大きなダイヤモンドから光の粒がこぼれて落ちてくるような感じで、言葉に言い表せない、そんな美しさです。この美しいショーが毎晩毎晩、日本中の灯台で繰り広げられています。今後はナイトツアーなんかあるといいんじゃないかなと思ったりしています。

あと、活用例。今日本には登れる灯台が16基あります。今、うちの町の灯台も登れる化したいということで、今日も美浜町から来てくださってすけども、野間崎灯台の方たちが登れる化を今目指しています。今後このように参観、見学ができる灯台っていうのは増えていくんじゃないかと思いますし、それを期待しています。続いて灯台の一般公開。この灯台記念日の周辺の土日というのは日本中で海上保安部さんによって公開がされております。その時はもう保安官さんのお話を直接伺えるので、私たち灯台マニアはもちろんですが、お子さんの将来の職業に対する勉強にもなるんじゃないかなと思います。あとは今、日本財団さんが「海と日本プロジェクト」というのをやってらっしゃって、日本中の灯台の42基を今「恋する灯台」として認定しています。海外には泊まれたり、レストランになっている灯台もあります。

とにかく私が言いたいことは、灯台を愛して欲しいんです。未来にもこの灯台を残していきたい、それにはやはり灯台ファンを増やすこと、地元の皆さんがぜひ、灯台を誇りに思って灯台をもっとアピール、もうアピールするだけのものなので、ぜひアピールをこれからももっと続けていただきたいと思います。私ができることであれば何だってさせていただきます。以上です。よろしくお願いします。ありがとうございます。ありが灯台！

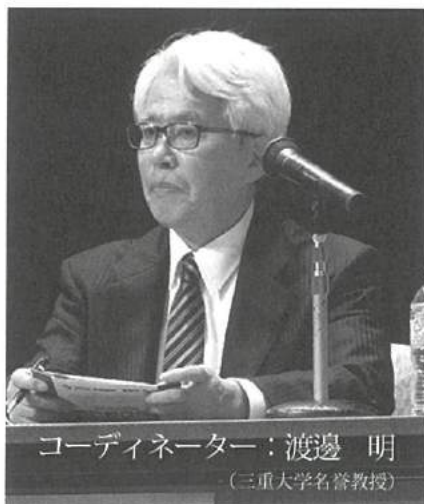


(6) パネルディスカッション

テーマ「地域資源としての灯台を使った地域活性化策を考える」

コーディネーター：渡邊 明（三重大大学名誉教授）

パネリスト：不動 まゆう、ヴァンサン ギグノー、
志摩市長 竹内千尋、銚子市長 越川信一、
御前崎市長 柳澤重夫、出雲市長 長岡秀人



渡邊：三重大の渡邊です。どうぞよろしくお願いいたします。私は生産管理論を大学で教えています。私の発想は遠く離れた地域の商品をうまくミックスして新しい商品を作っていこうというものです。1 + 1 が3とか4というシナジー効果はもう20世紀の発想で、私どもが考えていますのは1 + 1 が見たこともないようなものになる。いろんなところでお話するときには、1 + 1 が犬、と言っています。足してみたこともないようなものを作ってみたいと考えています。新しい商品は文化的価値を入れ込まないとできません。私たちが設計している商品の差別化は知識の束をいろんなものに詰め込んでいくことです。そういうものが今日のお話の中から生まれるといいなと思っています。まず志摩市の竹内市長から問題提起と思いの丈をお聞かせください。

竹内：志摩市はSDGs 未来都市に認定され、将来に渡って持続可能なまちづくりをやっていきます。まさに今日のテーマの灯台の持つ歴史的価値や文化的な価値というのを是非将来に繋げていきたいと思っております。そのときに個々の自治体、あるいは個々の取り組みだけではなくて、いろんな関係の皆さんと連携していく事が大事だと思っています。SDGs の17番目にはパートナーシップで目標を達成しようというものがあります。お互いに同じような資源を持つところあるいは課題感を持つところが連携して、その課題を共有しながら未来に向かって価値創造も含めて連携していこうということだと思います。これを機会に皆さまと連携が図れればと思っています。

渡邊：不動さん、日本の灯台に関して問題提起をしていただけますか。

不動：はい。今後、役割を終える灯台が増えていくことを案じています。GPSや人が運転しな

くても進む船などを理由に、灯台が灯台としての役割を終えたとき、どのように灯台を残していくか。海外ですと一般の人に売りに出されて、それを買った人がホテルに改築したり、自分で住んだり、レストランにしたりということがあります。

渡邊：観光の中に灯台を入れたいとおっしゃいましたが、何か具体的な方法のようなもの、地方自治体に要望、期待することはありますか。

不動：灯台の多くはなかなかアクセスが難しい場所にあります。そのアクセス自体をも楽しんでもらう仕掛けをすとか、バスツアーを組んで足に自信がない人にも行ってもらえるような仕組みを作るとか。まず灯台の場所やアクセスの方法をもっと具体的に分かりやすく知らせるべきです。灯台は訪れる時間によって全然見え方が違うんですね。私が好きなのは、早朝まだ灯台が点灯していて薄暗い時間です。でも朝日が昇ってくると灯台がずっと目を閉じる瞬間があるんですね。ああ灯台が今日も安心して眠りについたなあという。おすすめです。時間帯別のツアーもあると素敵ですね。

渡邊：ギグノーさんにいくつかお伺いしたいのですが、灯台を開放したら75万人位の訪問者が来た。そういうふうな、開放するだけでお客さんは大量に来るのでしょうか。

ギグノー：1860年ごろからフランスは灯台訪問が盛んになっていったのです。なぜならば海岸に人々が出かけるということが灯台訪問につながっていたからです。当時は灯台守がいました。灯台守がいることがとても重要なのです。まだ75万人が訪れるというのは、それが持続されているということです。今後、灯台守を復活するという考えは、ツーリズムにとってとても良いアイデアだと思います。

渡邊：こんなにどんどん灯台守が居なくなって、GPS等で要らないのかもしれないのですけれど、それでもツーリズムのためには何らかの形で灯台を守って行くような方たちを組織化しなければいけないのではないかと考えています。是非、志摩市の中でそのような活動をしていただけたらと思います。次に銚子市長さんにお話しをお伺いします。

越川：銚子は漁業と農業それから醤油の町でして、人口がだいたい今6万人くらいです。魚の水揚げは7年連続日本一で、だいたい28万t、300億円くらいの水揚げがあります。それから春キャベツも日本一です。もうひとつ、灯台でいえば参観者数が日本一で、10万人を超えております。犬吠埼という地名の由来は義経伝説です。義経が若丸という犬を連れて銚子へ逃げてきたところ悪霊に取りつかれてどうしても置いていかなければならなくなった。そのとき若丸という犬が悲しんで、そのまま岩になってしまったという伝説が残っています。それが犬岩という岩で、その鳴き声が岬まで聞こえたということで、犬が吠える岬、犬吠埼という名前が付いています。この犬吠埼の霧笛舎が用途を終える時に取り壊しの話もありました。でもなんとか残したかった。そこで市民の皆さんと一体となって、今は市が借り受けて保存しています。灯台がその使命を終えつつある中で観光的な活用、どうやって残していくのか、価値を市民の皆さんに伝えることが大変大きな課題だと思っています。このサミットに参加している自治体が連携して共通の課題に向かって何かを発信していくということが必要かと思っています。

渡邊：次に御前崎市長お願いします。俺は海の男だから灯台に一番思い入れがあるんだとおっしゃっている柳澤市長です。

柳澤：この8月にアジア陸上競技会がありましたが、その時に御前崎出身の飯塚選手が400mリレーで銅メダルを取りました。私どもの御前崎市の出身です。同時にパラグライディングという競技において、名古屋から移住して御前崎市に住んでいる方も金メダルを獲られました。メダル取得者が2人になり喜んでいます。また、農産物をはじめ水産物にも多くの優れたものがありますので、ブランド化して伊勢神宮に奉納することも進めていきたいと思っています。今日は地元から23人の方が来られていますが、この方たちは御前崎の灯台を守る会という会を作っていて、現在130名会員がいます。この皆さんと一緒に灯台を盛り上げていきたいと思っています。しかし課題もあります。私どものまちにある灯台は三方をブロックに囲まれていまして、なかなか自由に灯台の中まで行けません。そこで保安庁の方にずっとお願いをしておりまして、来年あたり海保の方から地元に移行しようじゃないかというお話を聞きました。そうなれば灯台そのものは無理ですが敷地については御前崎で購入させていただき、自由に入れる公園にしていきたいと思っています。灯台は歴史的なまた文化的な価値の非常に高い地域の資源です。地域の150年間の生き証人であると、そういった側面もあると思います。これから4市、そして参観灯台を有する市町が全国で一緒になって、さらに観光振興、地域の活性化といったものを図って参りたいと思います。

渡邊：続いて出雲市長お願いします。

長岡：縁結びの地、出雲からやって参りました、出雲市長の長岡と申します。出雲と言えば神々のふるさと。今ちょうど神在月でして、全国の神さんが出雲大社にお集まりになって神さんのサミットを開催されているという時期でございます。おかげさまで多くの観光客にお越しいただいております。1100万人くらい、出雲大社だけで毎年600万人です。ただ、その600万人の皆さん、出雲市内で泊まらないお客さんが多いのです。それを何とかしようということで、沈む夕日を神様として崇め奉る地域、「日が沈む聖地出雲」が昨年日本遺産に登録されました。出雲大社にも日御碕神社にも日沈みの神という神様をお祭りする祠があって、日本海に沈む夕日は我々にとっては特別な思いがあります。私も日御碕神社から見る夕日は北半球で一番美しいと勝手に思っております。出雲日御碕灯台は日本一の高さを誇る灯台です。かつては年間250万人くらいの観光客がこの日御碕エリアへ訪れていました。今は100万人前後しか来られていません。これが我々にとっては大きな問題であります。さきほど宿泊客が少ないと言いましたが、日が沈む聖地、夕陽を見るためには出雲に泊まってもらわなくてはなりません。それから、もう一つは出雲大社の早朝参拝、朝日の中で森に包まれた境内。心が洗われる思い。そうした観光を今進めているところです。その為にホテルをどんどん建てて、なんとか近年100万人は泊まっていだこうと数値目標を持っています。先ほどから灯台の歴史的文化的価値というお話がありますが、私ども出雲はまさに歴史や文化を売りにしているまちでございまして、灯台も含めた地域全体、

またそこに住んでいる人の暮らしぶり、生活の営みそのものが出雲の大きな魅力だと考えています。今の出雲にはいろんな要素があり、その中の大きな要素が日御碕灯台です。これから4市がしっかり、それから16の地域ともしっかり手を組んで頑張っていく必要があると思います。藤岡先生のお話に150年に浮かれるな、どうなるかわからんぞという警告がございました。灯台がその用途を失った時どうなるか、地域の皆さんが灯台を誇りと思う、その輪がもっと広がり日本中の皆さんの声として、偉大な歴史遺産をしっかり残そうと思っています。

渡邊：4つの市長さんたちのお話に共通していたのは、パートナーシップでしたね。灯台を地域資源と捉えて、インバウンドを含めて離れた地域で協力して構築していく観光戦略のようなものが作れるといいなと思います。続いて地域の活性化策についてお話しいただけますか。

竹内：さまざまなアイデアや取り組みを生かしながら、志摩市の灯台ツーリズムを伸ばしていきたいと思っております。特に星を見ながらのナイトツアー、早朝のガイドツアーをやりたいと思っています。先日東京の灯台の150周年記念式典で出会ったカナダの方とビンセント島の灯台の話をしたら、是非交流していきましょうという話もいただきました。また港町、漁師町に共通するような食材がありますので、灯台プラス食、グルメの部分でも4市で連携しながら、アピールできたらいいなと思っていますところ。

渡邊：続きまして、銚子の市長さん、よろしくお願いします。

越川：灯台を生かした活性化、まちづくりですが、何といたってもこういった事業は行政が音頭を取って進めていくと、うまくいかないものかなと思います。幸い銚子には、今日も来られていますが犬吠埼ブラントン会と言うリチャード・ヘンリー・ブラントンの功績を讃えながらまちづくりをやっていく市民の団体がございまして、素晴らしい研究をされています。このブラントン会さんを中心に犬吠埼灯台を活かしたまちづくりが進められて、どちらかというと行政はそれに追いついていくスタンスがいいかなと思っています。もう一度銚子市民が灯台愛を取り戻す、もっともっと芽生えさせる。灯台愛、誇りをいかに市民が持てるかということが、地域活性化の鍵だと思っています。ナイトツアーは何度かブラントン会さんを中心にやっていただいていますし、いろんな試みをしている状況です。

渡邊：銚子市はインバウンド観光を推進すると書かれていますが、何かお考えがあるのでしょうか。

越川：今、台湾と交流を深めています。台湾の桃園市、白沙岬というところに灯台があるんですけど、できればそこと姉妹岬のような形がとれないかと考えています。台湾の灯台は日本の統治時代のものも沢山ございますので、交流を深めて、まさに灯台ワールドサミットとして来年も国際色を出していければと思っています。

不動：私、台湾の灯台めぐりをしたんですけど、ほんとに、台湾の人達は灯台好きな人多いんですよ。私が灯台めぐりをしていたら日本語を勉強しているという大学生の女の子が話しかけてくれて、この灯台は日本人が改修して綺麗にしてくれたんだよ、と言っていろいろ灯台を案内してくれました。灯台を通じた国際交流は本当にあるなと思いました。海外向けのサイトがもっと充実していけば、日本に来たときに灯台も観ていこうというインバウンドの可

能性も増えていくと思います。

渡邊：続いて御前崎市長さんお願いいたします。

柳澤：今は灯台周辺の整備、駐車場やトイレのバリアフリー化などを手掛けております。灯台周辺と灯台の敷地を一体的に活用できれば、観光引客もやりやすくなるのではないかと思います。また、私ども静岡県では来年からデスティネーションキャンペーンが始まります。これは全国のＪＲも参加しますので、全国から灯台に訪れてくれるのではないかと期待をしていますし、これを機会に宣伝もしていきたいと思っております。２０２０年にはオリンピックが開催されますが、自転車、サイクルが伊豆で開催されます。県をあげてサイクルツーリングを進めていますので、御前崎の灯台もツーリング圏内に入れてくださるのではないかと思います。市をあげて、また県をあげて、観光振興に取り組みます。

渡邊：市長から頂戴している資料に、４市の全ての灯台を参観したら抽選で特産品の賞品が当たるイベントと書かれています。具体的なお考えは。

柳澤：いま、志摩の市長さんもお話しされましたように、それぞれの町が素晴らしい特産品があると思うんです。４市の灯台巡りをなさって４つスタンプが揃ったらお土産をあげるとか、そういったことをやっていったらどうかと思っています。同時に、今日も私どものところはお茶を持ってきておりますが、こうした場をきっかけに食を通じた交流もできたら良いと思います。

不動：食の交流は素晴らしいですね。私はまず灯台に行くと、その土地のグルメを求めて必ずスーパーに行くようにしています。するとお土産物屋さんだけで見られない地元の人達が普段どのようなものを召し上がっているかが分かります。それが灯台を縁にコラボレーションしてというのはすごく楽しみです。

渡邊：出雲市長さんはどうでしょうか？活性化策として何か。

長岡：いろんな試みをやっております。さっき言った日本遺産の認定、それから大山隠岐国立公園エリアの中にも日御碕周辺が入っています。国立公園満喫プロジェクトといって、全国８カ所、集中的にオリンピックまでに整備するエリアにも指定されています。あともうひとつ、日本ジオパークの認定を受けなければなりません。その３つのプロジェクトがすべてこの神様に集中して、それをうまく補助金も使いながら集中的に取り組んでいる最中です。課題はやはり交通の便です。出雲大社までは皆さんお越しになりますけど、そこから先の日御碕まで足を伸ばすというのがなかなか難しいようです。バスの便が１時間に１本ぐらいしかない。それを何とかしようと思って、トヨタさんが１人乗りの電気自動車、出雲大社から日御碕まで行って帰れるような能力のあるものを開発されていて、まだ売っていない車両ですが、これをトヨタさんと連携して皆さんにお貸しするということもやっていけたらと思っています。また海を活かして、クルージングと灯台、そこに食を絡めたものを、地域の漁業者にしっかりお金が入る仕掛けを作りながら構築していけたらと考えます。特に出雲はお越しになるお客さんの約７割は女性なんですけど、皆さんしっかりと目的意識を持ってお越しになっている方が多い。そういう長時間滞在しているいろんな体験をしたい皆さんに提供する体験型商品については、我々の見方からすると大したものじゃな

いというものが、実は訪れる皆さんにとっては大きな魅力になることがあります。観光でいいところを見てもらおうなどと考えずに、今あるものを上手く旅行の中に組み込めるような商品構成が大きな鍵を握るのではないかと思います。いずれにしても、お互い情報交換しながらしっかり取り組んでいきましょう。

渡邊：市長さん4人のお話を聞いて、不動さん、何かアイデアやヒントがあればお願いします。

不動：はい。灯台ファンとしてはどんなものが欲しいかなと思ったら、やはり灯台をモチーフにしたお土産です。意外と少ないんですね。犬吠埼ですと「灯台もなか」といって、かわいいものがあつたりするんですけども。なかなか日本は灯台の素敵なお土産が少ない。フランスとかだと、ほんとに散在するくらい、灯台に関する書籍や写真集、お土産フィギュアがいっぱいあるんです。日本の灯台のフィギュアなどもあれば、どんどん行って集めたいくなる。そこに行かないと買えないものだとやはり価値が生まれてくるんですよ。若い方のデザイナーさんとかも起用して、私たちの感覚にないもっと若い人でも欲しくなってしまうようなものができるといいなと思っています。

柳澤：いま出雲の市長さんがおっしゃいました、海を生かした灯台、陸上からだけの灯台でなく海の方から見た灯台、こういったものは活かせるものがあるんじゃないかと思います。全然違うと思うんですね、海から見ると。今日、保安庁の方も来ておられますので、GPSがあるから灯台は不要だという方もおられますが、登れる灯台だけは是非残していただけるようにお願いしたいと思っています。

渡邊：全部残しましょうね。

柳澤：実は私、34歳まで船長やっていました。8年間ほど。灯台というのは、なんというか目標なんですね。そこへ行くための目標。そこを通過するための目標。そうした安心感がありまして、遠く離れるときに、ぽーうっと灯台が小さくなって、見えなくなるまでずっと見ている。また逆に帰ってきたときには、ぽーうっとと見えてくる。本当に感動的で嬉しいんですね。船の皆さんに灯台が見えてきたよという、皆、ブリッジのところへ上がってくるんです。そういった思い出がありますので、灯台を是非とも残したいと思っています。

越川：最後に1点だけ。銚子はジオパークの認定を受けておりますが、犬吠埼もジオパークの大変重要な拠点でございまして、古い地層が残っています。毎月のように犬吠埼周辺の清掃を市民運動としてやっていますし、灯台愛を活かしつつジオパークとの連携とも活性化に繋がるのではないかと思います。

渡邊：これまで市長さんたちが話されたように、地域の活性化策というのは参加しているいろんな都市がパートナーシップを組んで集客効果をあげていくことが一番大事だと思っています。今回参加していない市にもなるべく参加を呼び掛けていっていただきたいと思うんですね。その為にも今日の会議がツイッターやインスタグラム、それからフェイスブックのようなもので拡散されると、多くの人に届くと思います。今日参加している4市の市長さんには、固いパートナーシップを組んで、集客効果をあげて、さらに、この会議に集まる市をもっと増やしていただきたいということで、今日のパネルディスカッションを終わりたいと思います。

（7）次期開催地あいさつ／閉会宣言

越川 信一（銚子市長）

次回開催地の銚子市でございます。来年是非来ていただけるように、動画で銚子を紹介させていただきたいと思っています。

（銚子市P R動画）

ありがとうございました。



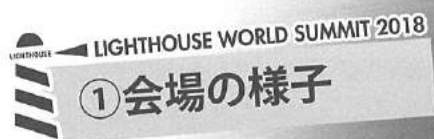
それでは最後に、今年4曲作った歌のひとつで、「犬吠わんわんわん」という歌を歌わせていただきます。これは先ほど義経に取り残された若丸が犬吠埼で悲しく歌っているイメージでございまして、犬吠埼は「海終わり陸始まる」というのがキャッチフレーズでございます。

（歌「犬吠わんわんわん」）

それでは来年は、銚子、犬吠埼でお待ちしています！



(6) 記録写真



レンズの展示



フォトコンテスト入賞作品展示



ブース



ブース



ブース



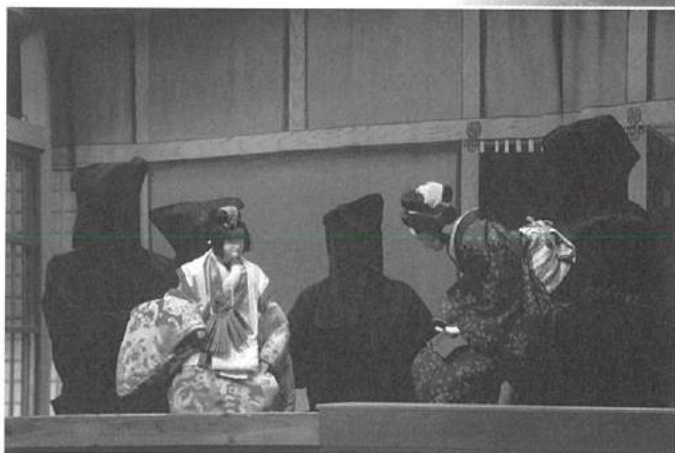
ブース



なみまる・しまこさん



ラジオ工作教室



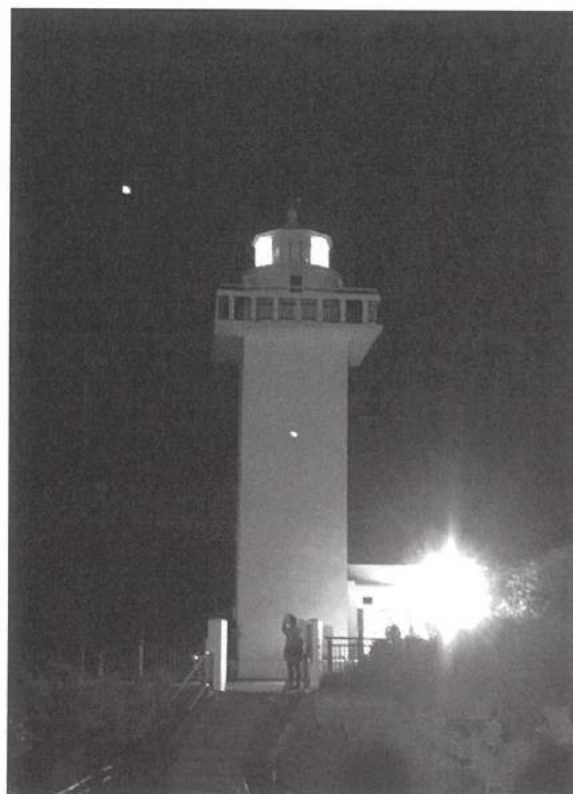
安乗人形芝居鑑賞



ガス灯器の点灯



交流会会場の様子



安乗埼灯台の夜間参観

LIGHTHOUSE WORLD SUMMIT 2018
③ オプショナルツアー



まちあるきの様子



ふるまい



ドローンでの撮影



集合写真

SDGs 未来都市 志摩市

SDGs (エス・ディ・ジーズ) とは、

「Sustainable Development Goals : 持続可能な開発目標」の略です。

2015年9月に国連で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」

に記載された、2030年を期限とする国際的な取組目標で、

密接につながる17の目標があります。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標



平成30年6月15日、志摩市は持続可能な開発目標 (SDGs) 達成に向け、環境・社会・経済の三側面の取組みを統合的・先導的に進めて行く自治体である「SDGs未来都市」に選定されました。

持続可能な御食国 (みけつくに) として、

- (1) 豊かな自然環境と共存する持続可能な農林水産業を推進するとともに【環境】
- (2) 地域に引き継がれてきた食文化の価値を見直し【社会】
- (3) 食材の生産者や料理人の皆さんと、その価値を国内外の人々に伝える【経済】

ことなどを通してSDGsの達成に努め、地域と世界の持続可能なまちづくりを進めます。



このシンポジウムは全国モーターボート競走施行者協議会からの拠出金を受けて実施するものです。

- 〔主 催〕 灯台ワールドサミット実行委員会、一般財団法人自治総合センター
- 〔灯台活用推進市町村全国協議会〕 志摩市 (三重県)、銚子市 (千葉県)、御前崎市 (静岡県)、出雲市 (島根県)
- 〔後 援〕 海上保安庁、観光庁、三重県、(一社) 志摩市観光協会、志摩市商工会、三重外湾漁業協同組合
- 〔協 賛〕 (公社) 燈光会、(一財) 日本航路標識協会

お問い合わせ

灯台ワールドサミット実行委員会事務局

〒517-0592 三重県志摩市阿児町鵜方3098-22 志摩市 産業振興部 観光商工課内

TEL 0599-44-0005 FAX 0599-44-5262

150th
LIGHTHOUSE
ANNIVERSARY

